



龍牙島を望む島プヌバ

立 本 成 文*

この三日間、梅雨のように雨が降り続けている。このような雨は一週間は続くのが普通だという。紙も湿気てくる。ここマラカ海峽のリング諸島の小さな島、プヌバ島は今雨期である。ガイドブックにも村の宿泊所があると記されている位「有名な」所であるが、この12月6日に入村していろいろ旅行者はドイツ人がダボからタンジュンピナンへ行く船待ちに泊まっただけである。1988年からの宿泊者記録をみると、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドは言うに及ばず、イギリス、フランス、イタリア、スペイン、オーストリア、ベルギー、ドイツ、オランダ、スイス、ノルウェー、スウェーデン、デンマークから来ている。280人の人が泊まったことになっているが、インドネシア人はその1/2である。シンガポールからは、突然91年から22人來ている。日本は延べ3人であるが、筆者が2回記帳しているので筆者以外は1名ということになる。

比較的隔離されている村としては外国人慣れしているとも言える。シャツをもらったとか、ナイフをもらったという話もよくしてくれる。いつも食事する店の横に金製品を売っている36歳の来村者がいる。土地の女性と結婚してここに定住するようになったという。たまたま筆者の着ている長袖シャツが気に入ったと見え、値段を聞くので、6万ルピアと答える。彼の半袖シャツは3,000ルピアである。記念にしたいので帰る時においていけという。いや、長袖シャツはこれしかなく、日本に帰ったときに寒いので、これがなかったら死んでしまうかも知れないから駄目だと説明するが、あなたがいなくなっても日本人がここにいたという記念にするから是非おいていけという。あんたが記念をもっていても、贈り主の私が死んでしまったら、私はどうなるのだという、ああちゃんとお祈りしてあげるという。死ぬのは神の定めた宿命とはいえ、こうまで言われると少々気分を悪

くする。それでも戸別訪問の時には「お客さん」なので怒るわけにもいかない。もっとも寒さで死ぬなどというのは想像外のこともかもしれない。

公称は1,000トン級の船も入港できる海深であるが、棧橋は小さな船しかつかない。それでもタンジュンピナンから週2往復定期船がかようので、先回きた1990年よりはずっと便利になったような印象をうける。もっともシンケップ島のダボが錫鉱山で大きくなる前は、このプヌバがダボ、ダエツよりにぎやかな中心地であったし、オランダが1917年から controller をここに置いていた歴史もある。実はこの宿泊所は、オランダ時代の阿片販売所であり、隣の村役場、学校の先生の住宅、現在も使っている9つの井戸も、すべてオランダの遺産である。1986年に続いて今年も全国的におこなわれる「村競べ」(Lomba Desa)の催しで州第一位となっている。86年と93年の村の報告を比べてみると、予算の数字が多くなっている以外は、殆ど同じ内容である。村競べに優勝できるのもオランダの遺産があるからだと見るのは、ひが目であるうか。

この村を選んだのは、豊富な水、清潔感といった生活条件の良さに魅せられたところが多い。こじんまりとした港で中国人とインドネシア人とが非常にうまく関係を保っているように見えたのも、もう一つの理由である。プヌバコタと呼ばれる店の並ぶ棧橋の向いにリパン島という周囲3km位の島がある。ここにオランラウトを定住させるために70戸の家ができあがったのが1982年である。63軒が残っていて、そのうち22戸には、マレー人、ブートン人、ジャワ人などが住んでいる。必ずしもオランラウトの調査のために入村したのではないが、ダエツ出身で、最近オランラウトと密接なラポールを作りあげたマレー人についてきてもらったので、どうもオランラウトを調査せざるを得なくなってしまった。一応リパン島に住む人全部の戸別訪問を終わったところである。大学院生時代にもどったような錯覚をおぼえる。今回はすべての種族から距離をおくために、村の宿泊所にと

* Narifumi Tachimoto, The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

まっているとはいえ、今までのところオランラウトに集中しているため、村人もオランラウトもオランラウトの調査に来たのだと思っているようである。オランラウトとつきあっているのが筆者にとっても楽なのであるが、オランラウトの日本人というイメージが定着してしまうと、プヌバコタの方の調査がやりにくくなるのではないかと心配している。

中国人を調査対象にしたことはないが、一番最初にフィールドに入ったケダ州のアロールジャングスで、故棚瀬襄爾先生のアシスタントとして、中国人の家を一軒一軒回ったのを憶えている。何を尋ねたのかは記憶にないし、棚瀬先生がそれをまとめられたこともない。マラカ海峡の島々で、中国人のコネがあると実に楽に旅行できることは、一度中国人の知人と旅行した時に経験済みである。そのようなコネのないプヌバで、どれだけ調査で

きるのかやってみないとわからない。

リング・リアウのマレー語は、マラカ、ジョホールとならんでマレー語の中心である。しかし、ちょっとジャカルタなどに行ったマレー人の青年は、ジャカルタ・インドネシア語を使いたがる。リアウ・リングでもマレー語は村のことばになりつつあり、町ではインドネシア語がもてはやされている。プヌバのマレー人はダエッ出身が主流であるが、バンカ、ブギス、スマトラ、ジャワの血が入りまじっている。今回の調査の主眼は、プヌバから見たマレー世界ということになるだろうか。立つ場所によって世界はどのように変わるのだろうか。あるいは、固定観念となってしまった世界だけしか見えないのだろうか。そのようなことをフィールドで考えてみたい。

(京都大学東南アジア研究センター教授)

カンボジアの迷走と仏教復興

林 行 夫*

92年暮れ、悪路続きの南ラオスのセーコーンを脱出してサワンナケートへ向かう途上、乗っていた車が転覆、大破した。歩行の自由を失って数日をサワンナケートで過ごし、担架に寝たままヴィエンチャンに空輸された。精密検査ができるバンコクの病院にたどり着くまで七日間。そこで、初めて腰椎の圧迫骨折と折れた肋骨の本数を知る。腰椎の損傷部があと数パーセントにおよべば車椅子の余生だった。結局、歩き走れるようになるまで5カ月を要した。心配をかけたラオス、タイの友人からは功德のおかげだと手紙をもらった。事故の半年前から93年7月20日出発が決定していたカンボジア調査(文部省科研費補助金国際学術研究「カンボジアの社会・文化に関する現状分析及び展望」<代表大橋久利/課題番号05041046>)に躰が間にあう。不安がないわけではない。だが、無性に嬉しい。今回は政情不安ということで調査地域もプノンペン市内及び周辺に限られ日程も短

い。この条件をいっように考えて、フィールドワークのリハビリとしよう。何をおいても、すべてはこの調査から再開したい一心であった。

89年以来、わが第二の故郷タイをとりまくようにして中国西双版纳、ビルマ、ラオスという上座仏教圏を訪れたが、今回の学際調査の参加はその延長線上にある。研究者の専門に応じて、プノンペン大学の教官総勢10数名がカウンターパートとして参加した。私は8月12日まで、プノンペン市内、郊外の寺院や集落で人びとの宗教活動をその生活史とともに聴き取った。儀礼については、入安居(*col watsa*)はもちろん、それに先立って市内・郊外のいたるところで行なわれた結婚式や新・改築儀礼を観察する機会を得た。また、仏教サンガの臨時集會にまったく偶然に参加することができたのも、たいへん幸運だった。

数年前に、タイ側から国境を超えて眺めた国のひとつである。正面玄関からみたカンボジアの風景、臭い、色合いはやはり違う。空港から市内へ行く途上、なぜかヤンゴンと似た印象をもった。ただ、プノンペン市内の人びとの表情はずっと明

* Yukio Hayashi, The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

るい。増改築中のホテルや食堂、い並ぶ雑貨屋の店頭は賑わいをみせ、去りつつある UNTAC 景気を残している。タイ人経営者によるタイ式スキヤキの店もあった。そんな街を行くと、大看板にペンキで描かれたシハヌークの肖像画が目飛びこんでくる。滞在中、この混迷時代に指導者は彼しかいない、彼はナ・メ・ボン（功德多き人）なのだから、という声を頻りに聞いた。とりわけ、ポル・ポト時代に地獄をみた中年以上の人びとからの支持は圧倒的である。王制復活の日は近いと思った（その通りになった）。ただ、どの肖像画の中のシハヌークも、今日の白髪翁ではなく、かつての若々しい顔貌であった。

昼下がりから夕刻にかけて、きまったように激しいスコールがきた。市内はたちどころに水瓶となる。かつて素晴らしく整備されていた下水道は甚だしく傷んでいる。ポル・ポト時代に無人化し、市内をおおった樹林が下水管を貫通したためという。路地もあちこち陥没している。国連派遣のフランス人技師は、修復には相当の年数がかかるという。夜は気をつけないと穴に足をとられる。

タイやラオス、ビルマの朝は僧侶の托鉢であける。ところが、ここはそうではない。僧侶の朝食は、俗人委員会 (*khana kammaka*) や在家修行者たちが届ける。僧侶は正午前にとる二度目の食事のために、きまったコースを托鉢にでる。午前8時前と市場近くの托鉢は禁じられている。市内から西へ30キロほど離れたコンボールの集落でもそうだった。近郊農村の寺院を訪れ、入安居儀礼の用意に余念がない人びとに出会う。その表情は実に生き生きしている。異口同音に、「功德が積めるんだよ、今は」。8月2日、市内の Wat Savay Pho Phe（「神聖マンゴー寺」）でこの儀礼に参加した。150



「神聖マンゴー寺」における入安居儀礼での食事布施

人以上もの人びとが講堂狭しと集い、用意した食事を僧侶と見習僧あわせて10人に献上するのだが、一人あたりの食事の種類と量がすごい。スープや焼魚、鶏肉煮など副食が20種を下らない。果実菓子だけでも10種はある。そして、タイでみなれた仏教儀礼につきものの、あの静謐の極にある喧噪があり、信仰の力が沸騰していた。郊外には破壊されたままの寺院、パゴダがまだまだ散見されるが、ポル・ポトが徹底的に粉碎したカンボジア仏教は、めざましい勢いで復興している。調査時で寺院数3,087（タイの約十分の一）、1979年のポル・ポト追放後に7人で始まった出家者は、約27,500（宗教省統計では僧侶と見習僧の区別がなされていない）人にまで回復した。21歳以上の男子が出家できる従来慣行は88年に復活し、翌89年の憲法に仏教は国教として明記された。かつての宗教局は91年12月に独立し宗教省 (*kraswong thammaka* / 英文公称は, Ministry of Cults and Religious Affairs. *cults* とは、上座仏教以外のイスラム、キリスト教などをさす。それらも排除することなく支援・管轄する意味を含む) となり、サンガを統轄する形が整った。また、同年同月のシハヌークの帰還とともに、旧体制時代にあった仏教「宗派 *nikai*」の区別も復活した。シハヌークが連れ帰ったブーカリー師は1974年に俗人としてタイにでて出家、後にフランスへ渡った僧侶だが、帰還して現トマユット派（タイからのタマユット派）唯一人の首長を務める。少数派のトマユット以外の在来多数派は、旧来のようにモハニカイとなった。宗教省の役人は、どの派であれくらしを秩序づける慣習 (*papheni*) 再建のために、僧侶が多いほどよいと強調する。

カンボジアには、在家戒を遵守して寺院境内周縁の庵に起居する女性修行者がいる。ドン・チー (*don chi*)、あるいはジェ・チー (*jhe chi*) とよばれる。市内では Wat Rusai Kaeo (竹林寺) に常住者が多い。通常は在家五戒から八戒を遵守し、新しい安居が訪れると十戒を守る。八戒を遵守する者は、ほとんどが剃髪して白の上下衣を身につけている。この寺では、十戒を遵守する女性が6名、八戒は2名いる。ほとんどが高齢の女性である。70歳近い彼女たちの生活史には凄惨なポル・ポト時代がそのまま刻まれている。一家をなしてから、配偶者のみならず、親兄弟、そして子供を失った。そして、ある者は隣国タイへ亡命しようとし、ある者はプノンペン市内で菓子売りを歩いた。そ

現 地 通 信

れらは、多くの人びとと共有される経験であるとはいえず、未だ追憶の檻中に入る段階にはなく、回想してもらうことが大変辛かった。肉親を失い、天涯孤独の身になって最後にたどりついた責務、それがドン・チーとなって寺院領地に起居し、瞑想することであったという。一本の線香に火をともし、それが燃えつきるまでの瞑想を朝昼晩の三度繰り返す。信じられないほどに穏やかな語り。「持戒し、瞑想を欠かさずにいれば、自分自身を清められる。そうすれば来世では、自分を養ってくれる子供を失ったり、食事に不自由することはないでしょう」。

今回収集した語りのほとんどは通訳を経ている。恥ずべきことに、ほとんどの人びとと informant としてしか対面していない。だが、通訳を務めてくれた外務省広報課のS氏（40歳）とはそうでなかった。彼もまた奇跡の生き残りである**。仏教用語で思わずタイ語がでてしまう私に、「オリジナ

ルはカンボジア。タイはみなコピーだよ。あんたは言葉も仏教も、偽物ばかりつかまされてきたんだ」の台詞を繰り返した、タケオ生まれの誇り高きカンボジア人である。彼の自文化礼賛は、別の文脈でもビルマやラオスで経験したことを想起させた。腰を入れて、東南アジア大陸部の文化と社会を考える1ヒントになりそうである。

【後記】

小稿は「現地通信」とめいうたれているが、帰国して半年近くたった時点でかかれた回顧録である。

**S氏はインドのジャーナリストがポル・ポト時代とその後を描いた書物 *The Survivors: Kampuchea 1984* (Arindam Sen Gupta et al. 1984, New Delhi: Patriot Publishers) の冒頭に登場する語り部でもあった。

(1994年3月1日記)

京都大学東南アジア研究センター助教授)